



月の裏で  
逢いましょう

弥馬都\_\_YAMATO

## 美しき糸

---

美しき糸

もがいては いけません

ただ

じっとしては そのまま朽ち果てるだけだけど

今は

もがいては いけません . . .

もがけば もがく程

その糸は絡まって ただ苦しみが増すだけなのです

どうせ抜け出せないのなら

今はただ じっとしていればいい

抜けるような蒼い空

小鳥のさえずり

自由のきかない そのままの身体で見つめてごらん

いつもと違う様子(けしき)に映るよ

ただ追われるだけの時間に

そろそろ嫌気がさしてたんだろ？

丁度都合がいいじゃないか。

ほら

今気がついたらどう？

心はこんなに自由だったって事が

おっと . . .

もうすぐ主(あるじ)が帰ってくる時間だ

君は最後に何を想うんだろうね  
あの女郎蜘蛛に甚振られながら  
生命(いのち)が消える瞬間に

今は  
あの娘が君を遠くから想ってくれる事を望むのか・・・

あの蜘蛛の顔が あの娘だと知るその前に

## 最高の贈りモノ

---

最高の贈りモノ

嫉妬は

憧れと憎しみが交差して 培われるものらしい

そんな邪悪より 快樂を貪ればいいものを・・・

疑惑は

どんな時に生まれるんだろう？

それなら相手の心を覗こうとする

浅はかな考えは お捨てなさいな

憎しみは女を強くするならば

そんな強さを お好みか？

弱いのですよ私(わたくし)・・・

そう

強さは あなたがくれたモノ。

意味は おわかりでしょうに・・・

戯れの果てに・・・。

---

戯れの果てに・・・。

戯れに恋をして

戯れに抱かれ

その果てに愛を知った。

本当は最初から奪うつもりだった・・・

冷酷な目

冷めた心

温かい唇は何を求め さ迷うの？

あたしの身体は冷たくて

抱けば抱く程 熱くなり色づく・・・

凍りついたままでなきゃ溢れだす想いを隠せない

だから声を出さないで

何も言わないで・・・

心の空洞に

その声は優しすぎるから

## 春の風

---

### 春の風

蒼き幼い風を頬に感じながら  
季節が巡り咲いた華をも  
ただ・・・愛でるだけ

ならば  
わたしは蕾のままでいることは  
儂き夢と諦めて

美しく咲き誇る華となり  
手折られる日を夢みよう～

わたしじゃない あなたへ～

---

わたしじゃない あなたへ～

もし翼が折れたなら  
折れた翼で飛べる場所(ところ)まで行き  
違う生き方を選んでみればいい

もし身体が傷ついたなら  
傷ついた身体を休め  
傷が癒えるのを待てばいい

もし夢破れたのなら  
違う夢をみればいい

そうやって自分の事ならコントロールできるのに  
どうしてわたしは何もする事が できないんだろう・・・

たとえば黙って寄り添う事ができたとしても  
私は彼女とは違う

あなたの傷は癒せない・・・。

子犬

---

子犬

子犬はね

一度構うとなつくんだ・・・

子犬はね

待つのが得意

猫はね

待つのも 待たれるのも嫌い。

気ままだから

勝手だから～

自分が甘えたいときだけ

傍にいてくれればいいの・・・

帰んなよ もう・・・

わたしより少し長いまつげがキライ

その綺麗な整った顔がイヤ。

飼えないから・・・

今日は帰んな

大好き

---

大好き

わたしの未来は あなたにあげない  
あなたの未来も いらないやあ～

今が欲しい  
この瞬間の繋がりが 私にとっての宝物だよ

空(くう)を舞う自由なハート  
拘束された身体。

だから わたしは今が欲しい

この瞬間  
そう あなたを感じるこの時間が  
わたしの一瞬だけの永遠・・・。

## 巣立ち

---

### 巣立ち

強く抱きしめると

一瞬で砕け散って目の前から消えてしまいそうな君

愛しい人に慈しまれたい熱い想いを胸の奥深く

見つけ出されないように隠しながら震えてる君

飛び立って大人になる事を恐れているの？

黒い大きな瞳で ただ黙って

じっと視線をそらさずに見つめ続けるから

僕の方が何だか照れて

理由もないのに視線をそらしてしまう・・・。

ねえ・・・

僕はいつまで待てばいいんだい？

君の視線の先に僕はいない・・・。

声

---

声

急に降ってきた悪戯な雨に  
少し戸惑いながらも

地面に跳ね上がり消えていく雨粒を眺めていたら  
一緒に遊びたくなった

降り注ぐように降る雨粒にジャンプして  
遊んでいたら水たまりには雨アヒルの足跡  
ハートがウキウキしてきて  
思わず声がでた

ニャア～ン

足早に家路に急いでいた男が その声に気づき  
ふと立ち止まる

おいで～

その優しく穏やかな声に魅かれるように  
その胸にジャンプした

スーツ汚れちゃったねえ～  
大丈夫かなあ～???

って気にする私。

猫お得意の顔を洗うふりして  
少し上目つかいで顔を覗いてみた

今日は雨だから  
月明りが届かない・・・

だから顔は薄ぼんやりとしか  
見えないや

大好きな人に  
少し似ているような気がした

そういえば声  
そっくりだったね

だから迷うことなく胸に抱かれたんだよ私・・・。

一緒には連れて帰れないなあ～

そう言った声が妙に悲しかった。

私はもう1度

ニャア～

と鳴いて今度は思い切り走った

その場から遠ざかる為に

そして明日(あす)こそ月明りが届きますようにと願いながら

コレクター

---

コレクター

愛を集めているんだ。

と顔色ひとつ変えるコトなく言っただけのあなた……。

そのコレクションに終わり(ピリオド)がないのなら

私は あなたに一度だけ抱かれない。

空虚な心の中に消えない証を残すように

私も

あなたを抱いてみたい。

そして私は

あなたという名の幻想と

永遠の愛に落ち

真の幸せを手に入れる

ホクロ

---

ホクロ

月は賑やかな 流れ星より

いつも自分の傍らに黙って微笑む  
一番星を愛している・・・

流れ星は少し拗ねて 月面に降り立ち

月の目の下にある  
クレーターという名の  
永遠に消えないホクロに似た印をつける。

嘘

---

嘘

嘘つき……

ねえ～

ウソついてるよねえ

って

わかってて

信じてるふりしてる私は……

大嘘つきだね

きっと……。

## 刻印

---

### 刻印

ギターを爪弾く ああなたの指が、  
私じゃない誰かの髪を優しくすく。

夢を掴もうと もがく私の指先は、  
あなたとは違う人の背中で宙を舞う・・・。

妖しく光る月明かりが 透き通った白い肌に  
青く反射する。

そして私の心は月に抱かれ、  
今夜も消えない赤い刻印とともに、  
心は、  
あなた色へと染まっていく

色

---

色

あなたから放たれる

様々な色を持つ言葉が  
わたしを元気にしてくれる。

ありがとう (^◇^)

知恵

---

知恵

女の知恵とは～

何事もなかった顔をして

平穩無事に日々過ごすコトなら～

わたしには

その知恵がないのだろう。

空

---

空

空は～

どんなに離れてたって

繋がっているから

どこにいても

見上げれば

まるで魔法にかかったみたいに

笑顔になれるね (^◇^)

愚かな人

---

愚かな人

理想を掲げて

それに近づこうと努力するのは素敵だ。

でも、

出来やしない理想論ばかりを唱えていても

何も始まらない。

それが解らなくなったら

あなたは

ただの人なのだ・・・

月光

---

月光

闇夜の中では

探してもみつからない大切な落し物

幸運にも今宵は月夜です

さあ

優しく穏やかな光に導かれるように

その先に手を伸ばしてごらん

きっと君が探していた大切なモノが見つかるよ。

## 巣立ち

---

巣立ち

僕は気がついてたよ・・・

君の髪の香りが少し変わった頃から。

僕は気がついてたよ・・・

君が僕の名前を呼ばなくなった あの夜に

僕は気がついてたよ・・・

君が何も言わないで僕の前から去ろうとしているのを

僕は今、気がついたんだ・・・

僕が愛してるのは君一人だということを

君が飛び立つ朝に・・・

## 禁断の果実

---

禁断の果実

ハート型のピッツアを作って

ワザと焦がした日曜日

私のハートが黒焦げになる前に

先に焦がしたハートのピッツア

トッピングは甘いあまいカスタードクリームと林檒

焦がしても

甘さは少し残るように

あなたがくれた

禁断の果実を添えて・・・。

まる。

---

まる。

ハッキリ物言う性格だから

その言葉に角があるって  
周りから言われてた

本当は とても泣き虫で  
弱っちいのに・・・

あなたの生み出すメロディーや  
あなたの声  
あなたの穏やかな優しさで

私は少しま～るくなった。

ま～るくなった私のハートは

一杯いっぱい笑えてるよ

そして  
ま～るくなった私のハートは

あなたのいる方へと  
コロコロ コロコロころがっていく～

# 紅い海

---

紅い海

生温かい紅い紅い海の中

まるで母の胎内にいた頃のように  
ま〜るくなって膝を抱え

波の音を聴きながら

眼に映る青い青い空と  
透き通るような藍い海の色を  
ただ ぼんやりと眺めていた

僕の身体から流れ出る

生きた証

生まれた証

紅い紅い証・・・

埋まらない心

空洞な心

愛した記憶

愛された記憶も

もう

どうでもいい昔のコトのようだね

白い白い砂浜が

紅く紅く彩られていくよ

やがて その血潮は

僕の眼に映る美しい色と混ざり合い

だんだん冷たくなっていく

僕の身体を包み込む

痛みも快樂も

もう何も感じない

ねえ

最期まで眼を開けてちゃいけないかい？

僕の身体を包み込む

紅い紅い美しい海が

どす黒く変わっていく瞬間を観るために・・・。

# 線香花火

---

線香花火

お気に入りの浴衣着て

あなたと行った夏祭り

繋いだ手を引っ張って

カランコロン

って下駄の響かせ

祭りの人込み抜け出した

さっき買った線香花火

二人だけの花火大会

パチパチ パチパチ

小さな火花

ねえ～

気づいてる？

最後に火玉が落ちる時

小さく

キュン

って鳴るんだよ

その声は  
あなたを近くに感じる  
わたしのハートのトキメキ

花火に照らされたわたしの頬が

幸せ色に  
さらに紅く染まってく

毎日毎日 あなたに恋する

わたしのハートが染め上げられるように～

## 月と太陽

---

月と太陽

素直すぎる君をみていると

何故だか最近 僕はイライラするんだ

正直すぎる唇

真っすぐな瞳

風に靡く黒く長い髪

細く頼りなげな身体・・・

そうさ

十分すぎるほど

君は僕を釘づけにする存在。

何時からだろう・・・

そんな君を少し憎むようになったのは

そうか・・・

君の視線が少し

僕より先を見つめ出したあの日からか・・・。

あの日確かに君は少し僕から視線をそらした

いつも僕しか映らない瞳の中に

別の何かが忍び込む・・・

仮面をつけた どす黒い影。

ああ・・・

気がつけば

僕の方が君を追っていたんだね・・・

黒く閉ざされた視線の先に

太陽のような光を求めて

今日も僕は君を追う・・・

君が転ぶのを待っているんだ

追い越した先には

いったい何が待ってると言うのだろうか～

そうして僕が振り向いた時に

君の瞳の中に 僕は映っているのだろうか？

君の視線は また僕を通り抜け

先を見つめているのかもしれないね

いつまでたってもゴールのない

追いかけっこ・・・

手を繋いで歩んでいたのに

いつの間にか 追って追われて 追い越して・・・

君の視線の先には

いったい何が待っていると言うのだろうか

それを確かめる為に僕は今日も走る・・・。

どちらかの息が切れるまで

追って追われて 追い越して・・・

見果てない未来(ゴール)に向かって

## ミルクティー

---

ミルクティー

あなたの おはようを聞くと

わたしの朝は幸せ色に染められて

たくさんのHAPPYが

昨夜の不安を消していく

あなたの おやすみを聞くと

わたしは急に不安になって

ハートがキュンキュンしてしまう・・・。

あなたの長い指先いが

何処をどう さ迷うのかが気になって

眠れない・・・

あなたが優しく触れるモノ

あなたが激しく弄るもモノに

軽く嫉妬して

わたしのハートは悲鳴をあげる・・・。

たとえば それがコーヒーカップでも

爪弾くギターの弦でも同じ

違うよねえ・・・

たとえば

たとえば・・・

の先に

打ち消しても

あなたの傍に寄り添う彼女(ひと)が瞳の裏に映る

嫉妬する女(わたし)

いけない女(わたし)

みにくい女になりそうで

怖い・・・

軽～るい嫉妬で済むように

わたしはメイプルシロップを入れた

ミルクティーを飲み干して

耳に残る

あなたの声に抱かれて眠る。

ああ・・・

早く朝がくればいいのにい～

どうでもいいこと・・・。

---

どうでもいいこと・・・。

サチィスチックに叫びながら

あの女達が何か叫んでいる

ああ・・・

と思わず僕の口からため息に似た息が漏れる

どうでもいいじゃないかあ・・・

どうでも

なぜ孤独(ひとり)の所有物にしたがるんだい？

そんな首輪をつけて

何が面白いのさ～

今の顔をごらんよ

あの美しく凜とした君達は幻だったようだなあ～

ああ・・・

いったいどこにいると言うんだい

僕の探し求めている女性(ひと)

ああ・・・

そうか

今頃あなたも 僕と同じように

冷たくなったベッドで僕とは違う残り香に

少し酔いしれながら

冷たく

冷え切った心で

男達の言い争う声を

まるで子守唄のように聴きながら

子供のように膝を抱え

眠りについてるんだろうか・・・。

僕の愛おしい君。

## 首輪

---

### 首輪

気がついた時から私  
ずっと首輪が つけられてたから

それを愛だと思うコトなどなかったの・・・。

いつもつけられていたのに

他の猫は違うの？

お外に行く時も首輪はリールで  
あなたと繋がってたから

道に迷うコトもなく

怖い思いもしないで

ちゃんと お家に連れ帰ってこれたは・・・。

お気に入りの首輪

黒い皮でできた首輪

その先は  
赤いリールで あなたへと繋がっていた。

なのに  
どうして今日はそれを外すの？

たまには自由に外の世界を

見てきてごらん。

どうして そんなコトを言うの？

どうして。

どうして。

どうして・・・。

自由きままな猫だけど

急に不安になるじゃない

外された首輪。

私の首にずっと ずっと  
つけられていた首輪

あなたの膝は  
私だけの指定席だったのに

今は見たことのない  
綺麗な人の白く長い指が  
あなたの膝に そっと添えられている

私は猫だから

その白い指に爪をたてるコトは得意なのよ。

ああ・・・

でもやめとこう

ねえ～

その首輪

どうしても外さなきゃだめなの？

いっその事

首輪に空いてる穴を緩めるのではなく

ゆっくり

ゆっくり締め上げてよ。

私は猫だから

化けてでるのは お得意かもだけど・・・

君。

---

君。

夜空を彩る夏の花火

地上から空高く高く舞い上がる

ヒュ〜ッ

パァ〜ン！パァ〜ン！！！！

一瞬に鮮やかに咲く大輪の華。

まるで君のようだなあ〜  
と僕は小さく呟いた

キレイだねえ〜  
と君は大きな瞳を子供のように輝かせ

首が痛くなっちゃあったあ〜  
と言って少し肩をすくめて笑う。

鮮やかに咲く大輪の華。

後のコトも先のコトも考えずに  
僕の胸に飛び込んできた あの日の君。

線香花火の頼りなげな静かな火花に  
僕は少し退屈を覚えた頃だった。

幼い君。

僕には守らなきゃならないモノが多すぎるのに

私 あなたを どうしようもなく好きになったみたい・・・。

影になるから・・・

と消え入りそうな声で言ったね。

大勢の人混みでさえ離れて歩かなきゃいけない二人

僕の束の間の愛によって

美しく華開いた君。

君もやがて消えてしまうだろうか・・・。

あの夜空に溶け込んで跡形もなく消えてゆく

花火のように

僕の心に美しく大人びた横顔だけを鮮やかに残して・・・

月。

---

月。

今日わたし  
お船に乗るの

おめかしして

髪も少し毛先を  
                        クルン  
と巻いて

お気に入りの  
ひまわり柄のワンピース着て

サンダルはいて

モチロン脚の爪には  
ペニキュア塗って～

今日わたし  
お船に乗るの

太陽の光一杯浴びて

負けなくらいな大きな笑顔で

今日わたし  
船に乗るの

潮風を頬にかんじながら

少し甘くなりすぎた  
わたしのハートが

これ以上  
甘くならないように

潮風に当たりにいくのよ。

今日わたし  
お船に乗るの

悪戯に近寄ってくるカモメと戯れに

今日わたし  
お船に乗るの

あなたを想い過ぎて  
甘くなり過ぎた 私のハートに

少し休みなよ

ってスパイスの塩ふりかけて

また あなたに恋ができるように～

そして太陽が手を振って  
海の向こうに沈んだら～

少し熱くなり過ぎた  
わたしの身体と心は  
一直線に あなたへ向かう

寄せては返す波ではなく

ただ激しく流れる川を遡る鯉のように

ああ・・・。

いつからなんだろう

月に抱かれれば冷たくひえてゆく身体と心に

幸せを感じ始めたのは・・・

もう海には還れないみたいだ

わたし・・・。

## 嫉妬

---

嫉妬

俺と目があった瞬間に  
お前の赤く鮮やかに彩られた口元が  
妖しげに笑みを浮かべた

こんなドラマみたいな偶然な茶番に俺は  
ただぼんやりと お前を見ていた・・・。

ああ・・・  
最近お前が妙におしゃべりになったのは  
そういうコトか・・・。

今の時代に流行らない煙草(こどうぐ)に  
俺は少し気取って火をつけた

まるでであったことのないような女(おまえ)

服装も  
化粧も違う。

隣にいる いかにも今風の男と腕を絡め  
お前はゆっくりと俺に近づいてくる

ぞっ！

とする何か俺の中に芽生えたと同時に今までとは違う感情が沸き起こる

顔色ひとつ変えず  
口元だけが まるで勝ち誇ったように笑う。

俺は俺で小さな手をつないだまんま  
ただ お前をぼんやりとみていた  
煙草の灰が落ちそうになるのも忘れて

パパ～

という声も もう俺の耳には只の雑音にしか過ぎなかった。

俺の知らない女(おまえ)  
まるで別の生命体。  
俺とは違う男と腕を絡めあい笑いながら  
何事もなかったように通り過ぎるお前

パパ～。次は あれにママと三人で乗りたいなあ～  
雑音に似た  
声だか何だかわからない音がする・・・。

お前に何か激しい感情を植えつけられた俺には  
この場から走り去り  
お前の肩を掴んで  
その男はだれなんだ！！  
と言うコトはできなかった

今度の水曜日  
お前はいつものホテルにくるのだろうか？

何だかわからない感情を抱えたまま  
俺は軽く煙草の煙と共に焦りと怒りを吐き出し

家庭(にちじょう)へと還っていく・・・。



## 甘い拷問

---

甘い拷問

あなたとの連絡は  
いつも秘密めいた携帯の中・・・。

お互いの時間の許す瞬間

想う気持ちが溢れ出した時の  
スパイなみの連絡手段。

わざと私は会議の時間を狙い

何でもない日常の戯言を～  
無理ムリの理由つけて

発信！！！！

ほら！

あなたの胸ポケットの携帯が  
静まりかえった会議室で  
マナーモードのブルブル音。

クールなあなたの顔色が  
チョッピリ曇るくらいに響きわたってるんでしょうねえ～

わざと意地悪したくなる私・・・。

仕事を終えたあなたからのラブレター

コラ！  
全く君って人はあ～  
放っておくと何をしでかすか わからない人だなあ～。  
僕はいつも君を想うしかないじゃないかあ～

そう！！！！  
私は普段は決してみせない あなたの素顔を  
唯一知ってる訓練された女スパイ！

そんな素顔を独り占めしするための今回の計画！！！！  
成功かなっ！？

本当は  
いつも あなたに見破られ  
今日も罠にかかったスパイ。

ねえ～  
今夜はどんな甘い拷問が私を待ちうけているのかしらあ～

骨

---

骨

何がきっかけで  
こんな話をしたんだろう・・・

自分が死んだ後のコト。

いい音楽におくられたいなあ～

共通の友人の葬儀の帰り道  
こんな あなたの小さな呟きからだったような気がする

うん・・・。

とだけ  
いつもは とてもおしゃべり好きな 私は答えた。

私ね～  
骨葬に決めてるの。

真っすぐにあなたに向けられた視線を  
不思議そうに あなたは覗きこんだ。

死んだ顔とか見てもらいたくないしい～  
先に大好きな人に 最後のキスしてもらって  
骨になるの・・・。

後は何本かのキレイな花と明るい音楽  
そしてお気に入りの写真が あればいいの。

そんな私の発言を  
いつものように軽くうけながして あなたは話を別の方へと導いた～

なあ～  
そんな先の話より現実(いま)の話しをしよう

そうだね  
そうだったは・・・

瞬間(いま)の話をしなくちゃね・・・  
私には もう・・・  
時間がないの

ねえ・・・  
神様。  
後どのくらいの時間がありますか？

小さく囁いた声は  
都会の雑踏の沢山の眩きの中に消えた。

さあ～て！  
明日からもがんばりますかあ～

あなたは  
少しおどけて笑う私の手を握り  
一気に赤から青にかわった横断歩道を駆け抜けた

私は少し苦しくなって  
左胸に抱えてる爆弾のタイマーが確実に進んでるのを感じながら  
あなたとふたり雑踏の中に溶けこんでいった・・・

## 夏休み

---

夏休み

子供の頃

決まって始業式前になって慌てて書いた絵日記。

記憶を少しだけ

過去にタイムスリップして

その日の天気をあらゆる手段で調べたり

写真を頼りに書きあげた～

私のハートのダイアリー

週末は何時も空白

あなたからの誘いが入るのを待っている

週末の日記は何時も空白・・・

記憶をたどろうにも何もない・・・

ポケットに忍ばせ いつも気にしているのに

ブルブルとも鳴らない携帯に

あなたの前では何故か おしゃべりな私に

たじたじで無口になる あなたを想いだす・・・

ねえ～

楽しげに今頃話してるの？

誰に触れているの・・・

ああ・・・

考えるのはよそう・・・

壊れそうだから

崩れそうだから・・・

だから許されているのね

週末の自由。

欲しくない自由。

もう少ししたら

この自由な快樂から抜け出せなくなりそうよ・・・

始業式がないのなら

日記を一気に書きあげて

このまま住み家をかえましょか？

上弦の月 2011/08/06の夜

---

上弦の月 2011/08/06の夜

時間がないから慌ててシャワーして  
濡れた髪のまま羽織った浴衣

いつも突然だね君の誘いは～

疲れてるんだあ・・・わたし今日

そう言って

断る 私の話し聞いてないしい・・・

まっ！いいかあ～

ほな、ちょっとドアの外で待っててよ  
着替えてくるから～

うん。

素直に待つんだあ・・・わかってたけど驚くわたし

少し迷って選んだ まっさらな浴衣。

派手な髪色の君の隣には

薄いブルーの紫陽花柄の浴衣の方が似合うね。きっと。

お・ま・た・せ～

濡れた髪

無造作にまとめて慌てて玄関の外に出た

さ～て！行こうかあ～

凄く自然に手を繋いでエレベータで降りてく二人。

似合ってるよ～

そんなコトも慣れた口調で平気で言うんだね  
あの人とは間逆だなあ～と悪戯な考えが ふと過る。

早く行かなきゃ～

うん。

少し小走りに河原に向かう  
君は その風貌と同じに少年のような顔を私に見せる

始まっているねえ～

そう  
始まったのかなあ・・・？

正面に打ちあがる花火より

わたしは左側にある右半分しかない半月を見ていた・・・。

キレイだね。凄いよ！！！！

はしゃぐ君を右手の温もりで感じながら

美しく潔く華開き散る花火より  
わたしは やはり欠けている半分を探し求め続ける。

左側にある  
あなたのような月を ただぼんやり眺めてた

欠けた半分

あなたの半分

わたしの半分・・・。

煙だか  
意地悪な夜の闇のため息なのかわからない  
ぼやけたような霞に包まれ  
右半分の月はやがて見えなくなった

今始めなきゃ！

そう決めた瞬間に花火大会のフィナーレを飾る  
沢山の花火が連打で闇夜を彩った

見せて！

---

見せて！

信じろと言うならば  
見せてみなさいよ！  
あなたの気持ちも。

疑いなんて・・・  
これっぽっちも芽生えたことなどないのに・・・

あなたは駆け引きが お好きなの？

どうして

どうして疑うの・・・。

いつだって正面からぶつかっているのに～

気持ちが通じてても

わからなくては意味などないのよ・・・。

何を躊躇い・・・

何を恐れているの・・・

いいじゃない。

気持ちの動くまま

想いのままに進めば・・・。

怖がりだけど無鉄砲な私

自由だけど少しだけ戸惑いを覚えた あなた・・・

グズグズしてたら

交わった線は違った方へと弧を描く・・・

点というピリオドで止めめられるのは あなた・・・

心残り突き進もうとするのは わたし・・・

止める気がないのなら

最後にせめて

壊して・・・。

このままだと始められない・・・



一年

---

一年

春には山菜を採った

お得意の天ぷらにして 美味しく食べたよ

子供みたいだけど

今年の夏も もうカブト虫も捕ったんだよ

釣りに行った先で海があまりにキレイだったから

写真を撮って写メったりもした

何だか私は

とる！

のがどうやら好きらしい。

だけど

一つだけ とられたまんまのモノがあるの～

それはマッサラの私のハート

あなたにとられて もう一年もたつんだね

ねえ～

そろそろ返してよ

今度はわたしが とる番なんだからねっ！

## 紅(あか)の秘め事

---

紅(あか)の秘め事

秘め事 . . .

それは私を惑わす甘い罠。

秘め事 . . .

それは自分を隠す手段。

単純過ぎる私 . . .

それを素直と笑い飛ばす あなた。

違うのよ . . .

ただバカな女に成り下がってるだけのコト . . .

どうしてだろう？

どんなに女優(おんな)を気取ってみても  
演じられない . . .

このままピエロに転落する気は  
これっぽっちもないんだから～

どうか

アクション！スタート！

が聞こえる前に  
深呼吸して本当の自分を沈めるの・・・

あなたに見せたコトのない顔で

上手く演じれるように～

青の瞬間(いっしゅん)に負けないように  
鮮やかに演じなきゃ・・・

青(ブルー)の理由を追い求めるように

そう  
初舞台は今始まったばかりだから～

わたしは紅(あか)の帰結を求め  
どんな顔を演じればいいのか・・・

終わりのない  
オールナイトムービーのヒロインの演技は  
始まったばかり



## 青い炎

---

### 青い炎

少し洗めの藍色の呂の着物に  
お気に入りの帯を  
                    キラッ！  
と結んで下ろしたての真っ白い足袋を履いた。

待ち合わせの場所には  
いつもは15分以上も遅れてくる　あなたが  
腕時計を何度も何度も覗きこみながら  
視線を人混みに向けて　私の姿を探してるのか  
と勘違いしたい程の眼差しを向けているのが見えた

そう・・・  
あなたが気にしているのは  
                    うっかり知り合いにでも会いやしないか！  
という  
つまらない理由からね～

私は小さく手を挙げて周りを気にする事もなく  
あなたに近づいた

着物を羽織っていても  
相変わらず私はおしゃべりで  
                    今日くらいは大人の女を思い切り気取ってやろう  
という計画は既に失敗だなと感じていた。

\*朝起きて ただ何となく書きだしました

まだ未完成です。

題材として『青い炎』というテーマを ある人から贈られたので

そこから話しを綴とうとしています。

未完成で公開するのに躊躇いもありましたが公開しながら続けさせていこう

と思っています

弥馬都

上記の通り 朝イキナリ書き始めた

この文は本日2冊目として出した

『青い炎』に転記しました

少々文面が違っていますが公開しながら

『青い炎』の中に1作品として

綴っていきたいと考えています

本当は詩として書きたかったのですが

短編小説風になりつつあります

『青い炎』も お時間が許しましたら

覗いて下さると幸せです

2011・08・09 夕方の

風に少しの寂しさを感じながら～

弥馬都

裏。

---

裏。

月の裏で逢いましょう

冷めた眼で見りゃ～無理なコト

現実では起こり得ないさ・・・。

月の裏で逢いましょう

君は呪文のように呟く・・・。

太陽のような君の裏の影

月の裏で逢いましょう

週末前の秘密事・・・。

月の裏で逢いましょう

怖いくらいに突き刺さる  
別れ際に聞く言葉・・・。

今宵

月の裏にたどり着けない君は

何をしているんだろう・・・

月の裏であいましょう

僕の裏顔(すがお)

真の囁き(おもい)

月の裏で逢いましょう

ああ・・・

どうしたらた重なり合い  
辿りつけるんだろう・・・

口づけ・・・

---

口づけ・・・

閉ざされた空間に足を踏み入れた瞬間に

私の物欲しげな唇は

熱くふさがれた・・・。

本当は冷めているくせに・・・

そんな叫びは

もう・・・

どうでもよくなる～

ずるい あなた(ひと)

ずるい わたし(おんな)

このまま今日も流れて行く・・・

深い深い海の底。

何も見えない海の底・・・

楽しげに笑う太陽は届かない

ただ月明りが満月の夜に微かに届く深い闇・・・。

あなたは唇をむさばるように吸う

まるで私の奥底に沈めた想いを掘り起こすように・・・。

ああ・・・

深く深く葬った想いまでは  
どうか掘り起こさないで・・・

もう俺も・・・。

---

もう俺も・・・。

手にいれるコトなんて  
案外簡単なコトさ

ほんの少しの甘い言葉と  
手練手管さえありゃあ～  
どんな女でも すぐ落ちるんだ。

ただ  
困ったコトに手放し方を  
どうやら忘れてしまったようだ・・・。

もう俺も年かな・・・。

## 不機嫌な朝

---

不機嫌な朝

不機嫌な朝に おはよう  
昨日ふいに途切れたメール。

不機嫌な朝に おはよう  
携帯を抱っこして眠れなかった昨日の夜。

不機嫌な朝に おはよう  
何かあったんじゃないか・・・と心配した時間。

不機嫌な朝に おはよう  
わたしのワガママで疲れたのかな？

不機嫌な朝に おはよう  
やっぱりわたし あなたが好きみたい。

素敵な朝に おはよう  
そう  
やっぱり わたし恋してるんだあ～

走る わたし

---

走る わたし

止まったままの時間

失われてしまった熱情

何度同じコトを繰り返せば  
気がすむんでしょうか？

私が一番嫌いなのは  
立ち止まるコト

走って走って走り続けないと  
生きていけない・・・。

先に進めない時間

熱情は日常という名の日々に  
消されてしまう

早く先に進まなきゃ  
わかっているくせに・・・。

それとも  
その熱情は

私の知らないどこかに向けられているのでしょうか？

それならいいんです。  
それなら・・・

わたしは待つのが少し苦手だから  
先を急ぎます

すぐに追いかけてきて  
捕まえて下さい。

そして  
先を急ぎ過ぎる わたしの手をとって  
また一緒に進んで下さい。

方向音痴の わたしが  
未来(みち)に迷わないように～

## 迎え火

---

迎え火

この季節になると  
君は僕のもとに一目散に走り寄り  
ピツタリと寄り添うように微笑むんだね

ああ・・・。  
君はずっとあの日のままの幼さを残し  
少し疲れを背負ってしまった僕のもとに走り寄る

もう数えきれないくらいの時間が流れ  
僕は少し年をとったよ

君が最後に言いかけた言葉  
何故・・・  
聞かないで あの日別れたんだろう

先に降りたタクシー

君を乗せたまま走り出した車。

バイバイ！またね～

そう明るく笑う君に少し照れた僕。

もうあのまま君に逢えなくなるなんて

思いもしないで・・・。

事故だったんだって・・・

気の毒に・・・

君が花に包まれる狭い空間で  
みんなが口ぐちに呟いてた。

真っすぐに僕を見つめ  
君が言おうとした言葉

いつも子供のように はしゃぐ君が  
急に大人びて見えたコトに照れた僕。

聞かなくてもわかってるさ

そう君は何時もこの季節  
僕の上に駆け寄って  
僕だけに抱かれにくるんだね～

ああ・・・

今年も  
送り火が青い炎となって  
君を さらって行くまでは  
君は僕のもの・・・

半分

---

半分

やっぱり あなたは私の半分  
欠けてる部分を補ってくれる。

やっぱり 君は僕の半分  
同じ考えを持っている。

同じようで違う二人

少しのズレに まだ気づかない・・・。

満月の夜に

---

満月の夜に

満月の夜だから

わたし あなたに逢えるかしら？

満月の夜だから

僕は君に逢えるだろうか・・・

ふたりの想い

重なる想い

時代(とき)を超え

時間(ながれ)に逆らって

月の裏で逢いましょう

月の裏で逢いましょう

愛しい人

ふたりはひとり

月の裏で逢いましょう

また・・・

こうやって嘘と秘密を重ねながら

月の裏で逢いましょう

ずっと

ずっと遠い約束

月の裏で逢いましょう・・・。

2011/08/14 望月夜に

『月の裏で逢いましょう』よ

り『彗星の乾いた悲鳴』

に移動して引き続き 毎日書き

続けます。

初作品の本を覗い

てくれて ありがとう

弥馬都\_YAMATO

弥馬都\_\_YAMATO 他、作品

---

弥馬都\_\_YAMATO 他、作品

『月の裏で逢いましょう』

<http://p.booklog.jp/book/31321>

処女作品です。

月の裏で逢いましょう 2 ～彗星の乾いた悲鳴～

<http://p.booklog.jp/book/32248>

ほぼ毎日更新中の詩集です。

『青い炎』

<http://p.booklog.jp/book/32076>

詩のような物語です。

箱の中

<http://p.booklog.jp/book/38522>

現在不定期で書いてる詩のような物語です。

弥馬都\_\_YAMATO もうひとつの顔

ふたりで綴る不思議な詩や物語の本も出しています

Blanco

<http://p.booklog.jp/book/32108>

Blanco 2 私の半分 僕の半分

<http://p.booklog.jp/book/33457>

ブランコロンの冒険

<http://p.booklog.jp/book/33025>

Blanco 3 A Cup Of World カップの中の世界

<http://p.booklog.jp/book/38212>

## 月の裏で逢いましょう

<http://p.booklog.jp/book/31321>

著者：弥馬都\_YAMATO

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/himitsunojikann/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31321>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31321>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.